

総合バルブメーカー キッツを訪ねて

ビジネス版

長野環境人士

自然を取り入れ、企業価値を高める



キッツグループイノベーションセンターと茅野工場＝茅野市金沢

環境に良い暮らしを楽しみながら実践している人に焦点を当てて自然に優しい生き方のヒントを探る対談連載「長野環境人士」は、持続可能な社会づくりに不可欠な企業の環境分野への取り組みにもスポットを当てます。環境への配慮から一歩踏み込み、本業として環境に取り組み、企業価値を高め、事業発展を目指す戦略を取り上げます。インタビュアーは引き続き、元環境省環境事務次官で環境経済政策に詳しい小林光さんが務めます。

小林光さん対談企画

茅野市、伊那市、山梨県北杜市長坂町に生産拠点を持つ総合バルブメーカーのキッツ(千葉市、河野誠社長)は脱炭素社会に向け、エネルギーの脱炭素化が加速する中で次世代エネルギーの本命と目されている水素事業に力を入れている。液化水素向け大口径のバルブの開発に着手する



水素関連事業や茅野、伊那市への思いを語る河野社長

必要な時に必要な量を安全かつ適切に供給する体制づくりが求められている。製造の過程では化石燃料を用いる技術もあるが、キッツは再生可能エネルギーを使って水素を生産する「グリーン水素」にこ

など水素社会の到来を見越して取り組みを加速する同社。河野社長は蓄積したノウハウを生かし、八ヶ岳山麓地域エリアのクリーンなエネルギー社会の実現にも貢献したい考え。水素は利用時に二酸化炭素(CO₂)を排出しないため、環境負荷を低減するエネルギーとして国内外で導入する動きが進んでいる。定着には水素をつくり、運び、貯めて、必

だわる。そこには河野社長の強い思いもある。

本業として環境問題に取り組む姿勢の原点は、同社とバルブ製造の歴史からも見て取れる。水や流体に関する課題と解決策を提案するキッツグループの共同活動「ウォーターンリユーション」はこれまで蓄積してきた技術やノウハウ、商品を生かした取り組みだ。

災害時には避難所として茅野市、伊那市にある事業所の社員食堂を避難所として提供する協定を地元自治体と結ぶ同社だが、仮にライフラインが寸断されても同社の浄水技術により地下水を使った清潔な飲料水、生活用水を提供できるのはウォーターソリューションの一例。地元採用の社員との対話から生まれた「地元に寄り添う」姿勢を具現化した取り組みでもあった。

(野村知秀)

119面に対談

再生可能エネ使い「グリーン水素」

グリーン水素の時代が来ると信じ

ビジネス版

長野環境人士

自然を取り入れ、企業価値を高める

小林光さん

対談

河野誠社長

株式会社キッツ



河野誠さん 57

キッツ代表取締役社長。バルブ事業統括本部長を経て2021年に現職就任

創業以来の技術で

小林 御社に関心を持ったのは、使用時に二酸化炭素(CO₂)を出さない次世代グリーンエネルギーの水素です。生産工程から再生可能エネルギーを使い、CO₂を出さずにつくる「グリーン水素」にこだわる姿勢を評価しています。化石燃料をベースにつくられる「グレー水素」や「ブルー水素」は結局、石炭などの資源を必要とします。

河野 水素関連は2008年から取り組んでいます。もともとは圧縮天然ガス(CNG)のバルブを作っていたのですが、当時から「これからは水素だろう」という感覚を持っていました。まずは水素用のバルブ、そして燃料電池自動車に水素を供給する「水素ステーション」へと発展してきました。

小林 先見の明がありましたね。河野 水素用超高压バルブは製品化が難しかったのですが、創業以来の長い歴史の中で培ってきた流体の流れを制御する技術と素材開発を組み合わせて実現することができました。他社にはなかなかマネができない技術だという自負があります。バルブユニットをはじめ、圧縮機、蓄圧器などの機器を集約化したパッケージ型も評価をいただいております。

企業の協業不可欠

小林 「グリーン水素」には個人的なこだわりもあります。河野 私は入社後、石油化学の分野でプラントにかかわる仕事の

本格的な活用が鍵

河野 水素にかかわる日本企業は約300社ありますから、協業は不可欠でしょう。まずはバルブ単体からユニット化へ。そして水素製造装置や太陽光、蓄電池といったさまざまなアプリケーションを組み合わせることでお客さんが求めるニーズに合ったものを提供していく。そういうビジネスをやりたいですね。

本格的な活用が鍵

小林 私が所属する東大先端科学技術研究センターでも水素技術に詳しい研究者がいます。御社との連携がよい結果につながればいいですね。視点を変えて、八ヶ岳



小林光さん 73

元環境省環境事務次官。東京大先端科学技術研究センター研究顧問。茅野市行政アドバイザー(環境分野)

諏訪湖の水きれいにしたい



キッツの歴史や技術の変遷を紹介する河野社長と小林さん

山麓のこの地では、水素をキーワードに何かできないでしょうか。

河野 私は八ヶ岳山麓エリアの山道(坂道の勾配や冬の寒さ)には、水素のパワーをうまく活かせると思います。八ヶ岳山麓の市町村で連携し、水素で走るバス(燃料電池バス)を走らせるとか、もっと進んで水素の軽トラが行き交うエリアになつたらいいなと思っています。当社の水素ステーションのノウハウを信州のために生かしたいです。

小林 素晴らしい夢です。この地域に向けて強く発信していきたい。さて、水素が今後、普及する鍵は何だとみていますか。

河野 電力会社や製鉄会社が本格的に活用するようになれば、かなり広がるだろうと思いますね。小林 この地域には鑄物の会社も多いです。

河野 当社も鑄物製品を電気炉で作っています。これも水素でできたらいいですね。

水はイコール環境

小林 御社は昔から本業として環境問題に取り組むという意識を強く持っているように感じます。何かいきさつがあるのでしょうか。

河野 当社の歴史は1951年の創業当初の給排水用配管で使われる青銅製バルブの製造から始まっていますのでやはり水です。

社員の提案で防災

小林 長野、山梨県内に生産拠点を設けていますが、新入社員も含め、各工場で働く社員さんには地元採用の人も多いと思います。地域とのつながり、貢献についてはどのように考えていますか。

河野 いかにして地元の人たちに寄り添えるかだと思います。切り口の一つは防災。これは社員の皆さんの提案でもあります。社員との直接対話で、もし被災したときに地元の皆さんの頭に「キッツ」が思い浮かぶような、そんな存在でありたいという話になりました。それには地域に寄り添い続ける積み重ねが大事です。この茅野工場と伊那工場は茅野市、伊那市との協定により、災害時には避



八ヶ岳山麓では水素を生かした地域づくりへの貢献を構想するキッツ

地元の人たちに寄り添って貢献を

ニュースメモ

グレー水素…石油や石炭といった化石資源から抽出される水素。水素を取り出す際にCO₂が出る。化石燃料で発電した電気を使って生成する水素も含まれる。この水素を使用する際にはCO₂が排出されないが、生成の過程で排出するため、カーボンニュートラルという観点からは評価されていない。比較的安価

ブルー水素…グレー水素の生成の際に出てくるCO₂を回収、地中などに貯留する。または利用する技術によって大気中のCO₂を増やさないようにする処理を行った水素

グリーン水素…太陽光発電でつくられた電気など再生可能エネルギーを使って水を電気分解し、生成する。使用時だけでなく生成段階も含めCO₂を出さない水素

水はイコール環境。最初は水を止める「流す」の技術ですが、その後「きれいにする」という考えに発展するのは自然の流れだと思います。浄化した水は、もう一度使う。節水や循環の推進です。そのようにして進化してきました。

小林 「原点は水にあり」なので

河野 当社でソリューションをといた話になったとき、社内から真っ先に「ウォーターソリューション」がキーワードとして出てきたのも自然の流れと言えるでしょう。

小林 その流れの一つかもしれないですが、諏訪湖でのユニークな取り組みを聞きました。湖水を飲用レベルにまで浄化し、しかもその水を地ビールの原料に使おうと。

河野 諏訪湖の水をきれいにしたいという思いは私たちの中に強くあります。諏訪湖の復活は個人的な願いでもあります。

小林 諏訪湖は水質的には改善傾向にあります。アオコが大量発生した時代から水質は改善傾向。ただ、その変化が厄介なことになっている側面もあります。例えば水草のヒシの過度な繁殖。私は今夏、ヒシ刈りに参加しました。

河野 私たちは湖畔のごみ拾いが中心ですね。新入社員はカヤックに乗って流入河川のごみ拾いもしていますよ。

も自前で提供できます。「困ったときには常にいます。そういう会社でありたい」。うちの社員の発想は素晴らしいです。

小林 企業が社会課題に取り組むことで社会的価値を創造し、経済的な価値の創造につながる「CSV」の提唱者、マイケル・ポーター氏によれば、もし、CSV経営を進める上で何をしたらいいかわからなかったら、工場などが立地するその地域でどうしたら地元のお役に立つことができるかを考えれば正解だという見解を残しています。まさに本道ですね。

河野 「何かあったときには私たちがここにいますからね。その思いをカタチにすることが地域に寄り添うことなのだと改めて感じました。ありがとうございます。